



社会福祉法人 愛徳福祉会

# 大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center

保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

# 葦

大阪発達総合療育センター機関紙  
第37号 2020年夏

## INDEX

・皆様への御礼	1P	・本人主体の地域社会を考えていきましょう	5P
・就任挨拶(理事長・センター長・副センター長)	2P	・リレーエッセイ	5P
・新型コロナウイルス感染症への対応について	3P	・入職式	5P
・第30回日本小児整形外科学会学術集会を開催して	4P	・就任挨拶(療育部・あさしお園・ゆうなぎ園)	6P
		・職員研修実績状況	6P
		・寄付金と寄付物品	6P

## 皆様への御礼 理事長退任にあたって

梶浦 一郎

2020年5月1日でこの施設が設立されてから満50年になりました。この50年という長い間園長として、その後は理事長として大過なく仕事を全うすることができましたのは、実に多くの人々の御協力、御指導があったお陰と心から感謝申し上げます。特に職員の皆様は日々の業務において真摯に子どもたちの治療、看護、介護を遂行され、多くの子供たちや保護者の皆様から感謝されてきました。それがあってこそ、この施設の順調な発展があったと存じます。改めて御礼申し上げます。

本年5月3日に50周年記念の会を開き、皆様に直接お目にかかり御礼を申し上げ、これまでの発展を喜び語りあう用意をしておりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行という思いもよらないことが起こり、残念なことに記念式典を行うことが出来なくなりました。また同時に記念式典を最後に理事長を退任するつもりで、退任のあいさつを予定していましたがそれもできず心残りでした。その代わりとしてこのお便りで私の御礼の言葉とします。

今後のセンターは新しく鈴木恒彦理事長のもと、更なる発展をすることと思います。鈴木先生は、神経生理学の基礎を学ばれた先生で非常に学究肌の方です。仕事はこれからすべてアカデミックな色合いが目立つようになると思います。私の仕事が経験的、素人的だったのを科学的、専門的に高めていかれることと思います。

鈴木先生のもとで職員の皆さんがさらにご活躍されることを心からお祈りいたします。

本当に長い間、有難うございました。



## 就任挨拶

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長 鈴木 恒彦



この度、当法人の理事長を拝命しましたので職員の皆様へ一言ご挨拶を申し上げます。我が国の近年の肢体不自由児療育分野の第一人者で恩師でもある理事長の梶浦一郎先生の後任として、どうかあがいても人徳、学術とも及ばず、何度自分に問いただしても力量には全く自信がないことを正直まず皆様に申し上げなければなりません。

私の当法人との関わりは、1976年3月末の雪の日に当時の聖母整肢園で開かれていたボパース法脳性麻痺講習会の中で、梶浦先生のご配慮で、神経生理学の講義を担当した時からでした。前年のロンドンでの講習会に参加し、ボパース夫妻の脳性麻痺療育の革新的考えに感銘した気負った講義だったかと記憶しています。医師として50年、内30年間は様々な場面で脳性麻痺療育に専念してきましたが、残念ながらいまだ自分で納得し満足しえた療育実践の経験がありません。しかし幸いに、梶浦先生の下に当法人には有能な先生方と熱意溢れる多くの職員によって過去50年間培われた技術とエネルギーがあります。これらのパワーの下に「謙虚と挑戦」の精神を忘れずに、利用者の方々への納得できる包括的療育、医療福祉サービスを目指して結束し、邁進していきましょう。

社会福祉法人愛徳福祉会  
大阪発達総合療育センター センター長 船戸 正久



今年6月にセンターにおける障がい医療・療育の大きな土台を築きあげられた梶浦理事長が勇退されました。それに伴い、鈴木センター長が新理事長に就任され、その後任として私がセンター長として任命を受けました。偉大な梶浦先生が築き上げられた業績を引き継ぐにはまだまだ荷が重いですが、鈴木新理事長を支え今後の「障がい医療・療育」の発展のためにできるだけ尽くしたいと願っています。

梶浦先生は、1970年に聖母整肢園を立ち上げ三大基本理念として、①「施設収容よりも在宅療養を」、②「脳性麻痺に対する積極的な医療」、③「脳性麻痺の療育は0歳から」を掲げ、英国からボパース法など積極的な医療・療育を導入されました。2006年に大阪発達総合療育センターに改名し新理念として「私たちは障がいを持つ人々が地域においても安心して生活できるように総合的支援を実践いたします」と決めました。これらの理念の中に梶浦先生の障がい児・者の方々への熱い思いが詰まっています。

このことを心に留め、職員の方々への6つのお願いをします。それは、①理念の継承、②専門技術の向上、③学術の推進、④教育システムの確立、⑤医療安全に対する意識向上、⑥経営の安定化への貢献です。それぞれの専門職としてこれらのことを心に留め、「患者様を宝物のように大切に」（ボパース博士）して励んでいただきたいと思えます。

大阪発達総合療育センター 副センター長 兼  
南大阪小児リハビリテーション病院 院長 川端 秀彦



まず初めに、梶浦一郎先生におかれましては理事長として私どもを長年にわたってご指導下さいまして誠にありがとうございました。センターの歴史は梶浦先生の歴史と同義語であり、先生にとってセンターは我が息子であると思えます。このたびご退任に合わせて、梶浦先生にとって何ものにも代えがたく大切な大阪発達総合療育センターの副センター長を拝任することとなり身の引き締まる思いです。これまで南大阪小児リハビリテーション病院院長として医療に関係するところを担当させていただいていましたが、これからは医療だけでなくセンターの関わる事業全般にわたって責任を持って携わっていかねばなりません。福祉や療育については全くの素人ですので、これから学んでいかなければならないことがたくさんありますが、梶浦先生の理念に基づいて、鈴木恒彦新理事長、船戸正久新センター長のご指導の下にがんばりますので、皆様方もご協力の程よろしく御願ひ申し上げます。

## 大阪発達総合療育センターにおける 新型コロナウイルス感染症への対応について

大阪発達総合療育センター センター長 船戸 正久  
事務部 部長 山口 備

1月に日本初の新型コロナウイルスの感染者が確認されてから、半年が経過しました。

この間、当センターでは2月27日に第1回目の新型コロナウイルス対策会議を開催して以来、7月20日時点で通算23回の会議を開催し、大阪府下の感染状況を注視しながら、その時々状況に応じた感染防止策を採ってきました。その主なものは以下の通りです。

### (1) 入所

面会の制限、入所者の外出制限、長期入所者と短期入所者の分離等、主に重症化リスクの高い長期入所者の感染を防止するために、外部の方々との接触機会を少なくする対策を行いました。

### (2) 通所

サービス利用者（及び保護者）の事前体調確認、兄弟姉妹非同伴の依頼、不要不急の利用自粛のお願い等を行うとともに、4月半ばから約1ヶ月間にわたり児童発達支援センター（親子通園）3事業所を休園しました。

### (3) 短期入所

利用者・保護者の自発的な自粛はできるだけお願いし、原則希望がある場合および緊急短期入所は積極的に受け入れる対応を行いました。その場合の事前健康チェックは、1F診察で慎重に行うようにしました。緊急事態宣言のピーク中は、4F短期入所棟を入退院のある2Fわかば棟に一時移動しました。

### (4) 外来リハビリテーション・外来診療

来院時の公共交通機関利用の自粛のお願い、リハ前診察時の検温実施、入所担当セラピストと外来担当セラピストの分離、入所者と外来リハ利用者の動線の分離・ゾーニング等を徹底しました。また、大阪市内でリハビリテーション病院における大規模クラスターの発生もあり、外来リハを4月22日から約3週間にわたり中止しました。また、外来診療においては、オンライン診療（電話再診）の採用により、外来利用者の来院による感染リスク低減を図りました。



### (5) その他

職員1人1人の基本的な感染防止対策（出勤前の検温、マスク着用、うがい・手指消毒等）や3密回避の行動の励行、利用者入館時の検温、衛生用品の確保、研修会や見学会の中止、環境消毒や換気の徹底等々、感染リスク低減のための対策を行いました。

以上の対策は、その時々行政の指針や感染拡大の状況に沿って対策の強度を変えて、利用者やご家族、関係者、職員の理解と協力に支えられながら実施されました。そして、7月20日の対策会議では、感染対策を「大阪モデル」に準じた「ODRCモデル」を作成し、レベルIからIV段階のレベルごとにそれぞれの対策を前もって定め機動的に適応できるようにしました。

また、万一センター内で感染者や濃厚接触者が発生した場合に備えて、センター内でのPCR検査の実施や陰圧室の導入設置等の方策が検討されました。

4月7日、政府による緊急事態宣言が発出され、5月後半には感染者の拡大は一旦落ち着きを見せましたが、宣言解除後7月中旬から第2波とも見なされる感染の再拡大がみられます。私たちは、コロナとの戦いが長期化することを見据えて、決して油断することなく、日々の感染防止対策に協働で留意していく必要があります。今後も利用者・保護者の方々のご理解・ご協力を宜しくお願いいたします。

# 第30回日本小児整形外科学会学術集会を開催して

南大阪小児リハビリテーション病院 院長 川端 秀彦



令和元年11月21日木曜日から23日土曜日にかけて「第30回日本小児整形外科学会学術集会」を開催しました。日本小児整形外科学会は現在約1,200名の会員を擁するわが国で最も大きい小児整形外科の学会で、小児の整形外科学に関する研究発表・連絡・提携および研究の促進を図り、整形外科学の進歩普及に貢献し、もって学術文化の発展に寄与することを目的に設立された学会です。今回は30回の節目かつ令和の最初の日本小児整形外科学会でしたし、大阪での開催は初めてでしたので、周到に準備して学術集会開催にあたりました。

総務省統計局の発表によれば、わが国の総人口は平成6年の1億2784万人を頂点に急激に減少し、100年後には明治時代後半の水準になるとされています。近年の人口の減少傾向は平成17年頃から顕著となり、同年に合計特殊出生率が1.26と統計史上過去最低となって、出生数は平成28年には100万人を割り込みました。さらに年齢別人口構成も大きく変化し、子どもの数は加速度的に減っています。このようにわれわれを取り巻く環境は大きく変化し、少子化ゆえにひとりひとりの子どもを大切に育てていく

ことが重要な時代となっています。

こう言った時代に、ひとりひとりがもう一度改めて過去と現在を俯瞰して未来のことを考えるきっかけに本学術集会がなればという思いから、今回の基調テーマを「小児整形外科医のアイデンティティ」としました。特別講演では大阪大学病理学教室の仲野徹先生に「アイデンティティ ー氏と育ちとエピジェネティクスー」と題して人間のアイデンティティを遺伝と環境の相互作用の観点から解説していただきました。また6人の海外演者を招待し、教育研修講演をお願いしました。

今回の学会では障害児医療も取り上げ議論しました。新生児医療の発展は大切な命を救った反面で、皮肉にも脳性麻痺の発生頻度を上げました。障害を持って生を授かった子どもたちが先進医療の陰で忘れ去られることのないよう、まずはその現状知ってもらいたいと思いました。折しも成育基本法が施行され、その基本理念について参議院議員自見はなこ先生にご講演をいただきました。

学会場となりました大阪市中央公会堂は昨年に開館100周年を迎えた赤レンガの外装が美しい重要文化財です (<https://osaka-chuokokaido.jp/>)。明治42年に渡米実業団に参加した岩本栄之助が、のちに北浜の風雲児と呼ばれた株の仕掛け人ですが、米国では財をなした富豪たちが公共事業に私財を投じるといった実態に感銘し、帰国後に多額の寄付を大阪市に行い、それをもとに建造されたというまことに大阪らしい建物です。学会に参加された方々にも、そういった文化の差に思いを馳せつつ、各種の歴史的な建築様式が混在した外観と内部空間の多彩な演出を学会の合間に楽しんでいただけたと思います。

最終的に290題の演題、約550名の参加をもって成功裏に学術集会を終えることができました。当日の運営にあたりセンターからはわれわれ医師に加えて14名の方々のご助力をいただきました。大阪大学関連施設の多くの先生にもご協力をいただき、特に吉田清志先生は事務局担当として多くの時間を割いて下さいました。また川村義肢を始めとする多くの企業からもご支援をいただきました。みなさまに紙面をお借りして御礼申し上げます。

本人主体の地域支援を考えていきましょう!

2019年度職員向けに「地域自立支援研究プロジェクト」を1年間行いました。

これは、地域で自立生活を営まれている障がいのある方を講師にお招きし、ご自身の経験談を通じ、そこから私たち職員が学んでいこうという目的で実施しました。

今回講師を務めて頂きました方は、岸田美智子様です。岸田様は、脳性麻痺による四肢麻痺の障がいがある方で、日常生活において多くの支援を必要とされていますが、若いころから自立した生活を送ってこられ、現在も社会福祉法人あいえる協会ピアエンジンに所属。障がいのある方への支援活動に従事されています。お住まいは大阪市内のマンションに一人暮らしをされています。ご利用者様の立場からのご意見は私たち職員にとって多くの気づきを頂くことが出来ました。必ず今後の支援に多くの事を活かせると思います。

以下は岸田様からのコメントです。

昨年度、こちらの職員の方からお誘いを受け、法人アドバイザーとして「地域自立支援研究プロジェクト」に取り組みさせていただきました。

当初は、病棟の日中活動など支援の様子を拝見する計画でしたが、私の身体の具合がこれまで経験したことがないほど悪く、5階ホールでの定期学習会と1階リハ室での交流会を隔月に計5回ずつだけの実施となり本当に残念でした。

現在、フェニックスに入所されている方々が利用されている移動支援は、全国的にはまだめずらしいことで、30年前から私たちが活動をはじめ、大阪市に要望して、1991年に制度化したものです。定期学習会や交流会では、私の体験やグループホームでの生活など懐かしい動画や紙芝居などを用いて、私自身の生い立ちから、子宮摘出問題、最近の相模原事件まで、優生思想の歴史と課題にも切り込みました。

勤務上、病棟職員の方々の参加が少なかったことは残念ですが、参加された皆さん、障害者の自立生活運動の歴史や制度をご存じない方がほとんどでした。

センターの皆さんは、素晴らしい知識と技術をお持ちです。今後もセンターの皆さんと共に障がい者の豊かな暮らしを実現するための一歩に、このプロジェクトがなって欲しいと実感しました。これからも皆さんよろしくお願いいたします。

社福)あいえる協会 ピアエンジン 岸田 美智子

療育部 部長 井ノ上智世

私は、平成11年4月、南大阪療育園へ就職し、病棟勤務を中心に21年間障がい児者の療育に携わってきました。わかば、フェニックスの病棟棟長を経て、令和2年4月1日、療育部長に就任、療育部のマネジメントと通園部門に携わる役割をいただきました。



通園部門では、近隣地域で暮らされる障がいのある方と携わる機会が多くなり、センターの理念「障がいのある人々が地域において安心して生活できるよう支援します」に繋がる地域や他施設との協働や連携の大切さを改めて実感しています。

今後、療育スタッフとともに、多職種協働や連携をより強めチームワークを発揮しながら、センターの理念に貢献できるよう精一杯努めていきます。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

療育部 ふたば園長 岩元 康

4月からふたば園長に就任しました岩元です。どうぞよろしくお願いいたします。



港分園からの異動ですが、支援学校在職時に当センター内分教室で長年勤務していましたので、どこか懐かしい想いとワクワク感でいっぱいです。年度当初から新型コロナウイルス感染予防対策で、みなさまにはご不安の中、いろいろとご理解、ご協力をいただき感謝申し上げます。保育中の子どもたちは、毎日あかるい笑顔でさまざまな活動をたのしんでいます。遊びの中から経験したこと、発見したことを通して、少しずつ歩みをかさねていくことでしょう。ご家族の方には、そんな小さな一歩一歩を見つめて、ともによるこびながら過ごしてほしいと願っています。

あさしお・ゆうなぎ園 園長 西野 紀子

2020年4月よりあさしお・ゆうなぎ園の園長を務めさせていただくことになりました。



両園は対象とする障がい種別が違うため、伝統的に並行した形で支援を行ってきました。近年は、難聴を合併する疾患の子ども達が両園に通うことも増え、姿勢や運動、見ることを使うこと聴くこととの支援を相互に活かすことが、我々の強みになると感じています。全職員が参加する会議、両園の保育士同士の交流、発達障がい児へのコミュニケーション支援をゆうなぎ園で継続することを通して、お互いを高めあえる施設を目指していきたいと考えています。皆様の温かいご支援ご協力をお願いいたします。

職員研修実施状況

令和2年1月～

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
令和2年1月15日(水) 17:40～18:40	医療ガス安全管理委員会 教育研修部	医療ガス安全管理研修	株式会社ババ 医療ガス情報担当者 岡崎久幸氏	43名	5階ホール
令和2年1月22日(水) 17:40～18:40	教育研修部	人権研修 地域自立支援研究プロジェクト学習会 「青い芝の会について」	岸田美智子氏	20名	5階ホール
令和2年2月14日(金) 17:40～18:40	教育研修部	医療安全研修会 「発達障害から学ぶセーフティマネジメント」	飯島慎貴医師部小児科医長 内本薫看護部医療安全担当主任	63名	5階ホール
令和2年2月19日(水) 17:40～18:40	教育研修部	人権研修 地域自立支援研究プロジェクト交流会 「障害者福祉の歴史クイズ」	岸田美智子氏	19名	1階理学療法室
令和2年2月27日(木) 17:40～19:00	教育研修部	「障害のある子どもを地域で支える ～育ちを支えるために支援者ができること～」	信州大学医学部新生児学・療育学 特任助教 亀井智泉氏	52名	5階ホール

創立50周年記念講演会

令和2年1月29日(水) 17:40～18:40	教育研修部	「動的脊柱装具DSBのこれからと痙縮に対する 新しい治療 - 体外衝撃波治療の試み -」	御勢真一医療技術部長	61名	5階ホール
令和2年2月6日(木) 17:40～18:40	教育研修部	「モンテッソーリ教育の取り組み 2年間の歩み」	羽多野わか小児科医師	65名	5階ホール



看護部 フェニックス3階病棟 国本 愛合子



キャッチフレーズがありました。必要なのは、筆ペンと何でもいい白い紙。ルールはなく、好きな言葉や、好きな字を好きなように書く。全部自由。ちょっとした時間でできる。と書いてありました。「これならできそう!」と、早速、筆ペンと落書き帳を買い、書いてみました。すごく楽しいのです。

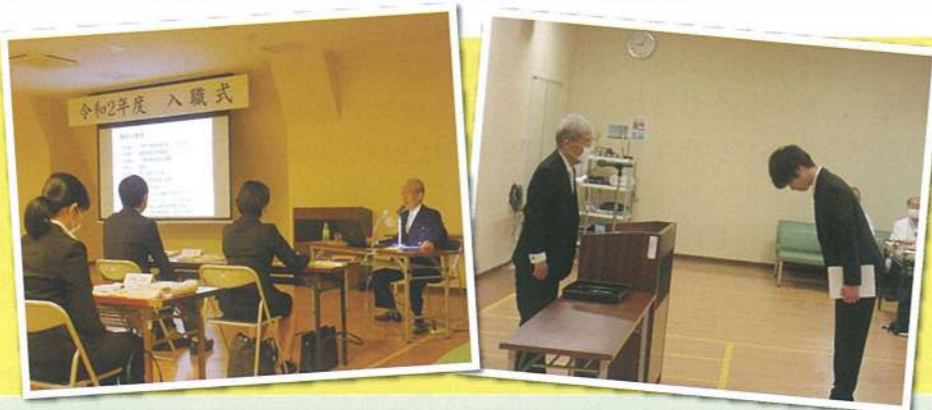
落ち込んだら「楽しい」と書いてみる。イライラしたら「大丈夫」と書いてみる。書くだけで、スッキリするんです。字だけでは淋しいな～と思い、パステルや、顔彩の使い方を習い、いろんな字を書いてみました。筆に関係なく、お花や、キャンドルにもチャレンジ。時間がなくてあきらめていたのに、自分時間をどんどん作ることができました。そして、いろんな人達と出会う機会も増え、日常がキラキラしてきました。自分時間が出来るのです。生活は変わらないのに、筆1本で本当に世界が変わったのです。みなさんも、何か書いてみませんか? 何かが変わるかもしれません。素敵な自分時間探してみてください。



次回は療育部ふたば 田坂なお子職員です。お楽しみに!

入職式

4月1日に入職式が執り行われました。今年は32名の新しい職員の方が入職されました。



感謝 大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

一般寄付金	本園 (R2.1～R2.6)	寄付物	分園 (R2.1～R2.6)
1月分	ダイセル労働組合本社支部	匿名	匿名
2月分	2月分楽基金 5件	匿名	匿名
3月分	岡本啓治	匿名	匿名
4月分	3月分楽基金 4件	匿名	匿名
5月分	4月分楽基金 1件	匿名	匿名
6月分	5月分楽基金 56件	匿名	匿名
	梶浦 一郎 様	匿名	匿名
	6月分楽基金 2件	匿名	匿名
1月分	細井雅之 (11月)	匿名	匿名

大阪発達総合療育センター | 発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会  
URL: http://osaka-drc.jp

南大阪小児リハビリテーション病院(保険医療機関)  
フェニックス(医療型障がい児入所施設・療養介護事業・短期入所事業)  
わかば(医療型障がい児入所施設・短期入所事業)主として肢体不自由児  
ふたば(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業)主として肢体不自由児  
いぶき(特定相談支援事業・障がい児相談支援事業)  
なでしこ(生活介護事業・児童発達支援事業)

訪問看護ステーション めぐみ(指定訪問看護事業)  
TEL:06-6699-8855 FAX:06-6699-8856  
ヘルパーステーション めぐみ(指定訪問介護事業)  
TEL:06-7506-9223 FAX:06-6699-8856  
〒546-0035 東住吉区山坂5-9-16

大阪発達総合療育センター あさしお診療所(保険医療機関)  
あさしお園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として肢体不自由児  
ゆうなぎ園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として難聴児  
〒552-0004 港区夕風2-5-3  
TEL:06-6574-2521 FAX:06-6574-2524